

日本語教師養成を目的とした海外インターンシップ -その取り組みと効果をめぐって-

著者	春口 淳一
雑誌名	長崎外大論叢
号	18
ページ	21-40
発行年	2014-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000058/



日本語教師養成を目的とした海外インターンシップ —その取り組みと効果をめぐって—

春 口 淳 一

An Internship in Japanese Language Educational Establishment for Training Students to Be Japanese Language Teacher: Focus on Approach and Effect

HARUGUCHI Jun-ichi

Abstract

This thesis conducted a survey of what the effect of the international internship which was intended for Japanese language teachers to train in Japanese-language educational establishments. This program was carried out at a Chinese university that has a partnership agreement with a Japanese university. Students who took part in it observed a lot of classes as teaching assistants and organized an event to introduce Japanese culture to students learning Japanese in the university. According to the survey participants were satisfied with this internship and conscious survey proved that students' awareness was improved after the program. Moreover it is a valuable opportunity that many Japanese learners interact with native speakers such as the internship students. This time, the research makes clear that the internship has multiple benefits to both of universities. In other words, it shows the mutual gains that a program which facilitates exchange among universities gives.

キーワード：海外インターンシップ 日本語教師養成 大学間交流

1. はじめに —海外インターンシップの背景—

「グローバル人材育成の観点から、海外インターンシップのプログラムの開発・普及を推進する必要がある」(文部科学省ホームページ)^{註1}

大学の国際化、また日本人学生のグローバル化が求められる昨今、海外インターンシップは文部科学省が強く勧めており、就業力育成事業等で補助金支給の対象事業にも挙げられてきた。このような背景の中、地方都市にある小規模大学（A大学と仮称）で実行された海外インターンシップを本稿では取り上げる。その一連の取り組みと効果を検証し、併せて課題点も探ることで、同様のプログラムへの提言を為すことを研究の目的とする。

A大学においては、2013年10月に日本語教師養成を目的とした海外インターンシップが行われた。海外インターンシップ自体は2011年8月に実施したもの（研修先は中国・厦門、台湾・高雄の2コース。それぞれ受け入れ機関はA大学の協定校であり、前者をB大学、後者をC大学と仮称する）がA大学としては初の試みであった。このとき厦門コースを引率した at01氏^{註2}に、「どのような活動があっ

たのか」「インターンシップが研修内容に占める比重はどの程度であったか」「参加学生のニーズ」について尋ねたところ、以下の回答があった。

Q1：どのような活動があったのか？

A1：一つは語学研修として、あちらの中国人の先生に中国語を習うということをしました。で、あとはあちらの厦門市の厦門図書館とあとは、日本の企業と貿易を行っている服飾関係の企業、それぞれに学生がそちらでインターンシップをしたという活動、あとはB大学の学生たちとの交流会、ですね。そのようなことをやりました。

Q2：インターンシップの比重は？

A2：ほぼなかったと思います。その工程の中で取られていた日も1日ですし、その1日のうちの半日もやっていなかったと思います。

Q3：参加学生のニーズは？

A3：十分に事前の連絡もありませんでしたし、中国に行ったことのある学生や中国語を知っている学生もほぼいなかったのので、インターンシップ先がどこかということに対してコメントをする学生はいなかったです。実際にインターンシップであるという意識は希薄であったと思います。

つまり前回は語学研修としての性格が強く、またインターンシップと言っても限られた日程で行われた職場見学に限定されるなど職業体験としての性格が希薄であった¹³³。よって、明確に職種を規定して実施された本取り組みこそが、A大学における海外インターンシップの事実上の嚆矢として位置付けてよいだろう。

2. 海外インターンシップと日本語教育

2.1 B大学との交渉と挫折

前述の通り、補助金の対象となるなど実施を国レベルでも求められる海外インターンシップであるが、2012年度はなぜ開催されなかったのか。at02氏が協定校（B大学）との間での交渉を踏まえ、A大学「就業力育成事業推進委員会」に提示した会議資料がある。以下資料1として抜粋して提示するとともに、ここから2012年度に断念するに至った経緯、その課題を詳らかにしよう。

資料1：「就業力育成事業推進委員会」会議資料（抜粋）

5月以来交渉を重ねてきたB大学での海外インターンシップですが、実施は難しく、今回は見送ることになりました。

当初、中国語力を問わず、内実を中国語研修として募集しました。昨年と異なり補助金を支給できないこともあり、この段階では応募者がおりませんでした。

そこで人数を限定し、中国語既習者を対象として再度個別に声掛けをしたところ、1名興味を示しました。この学生の希望により、研修色を高めたインターンシップ案を先方に打診したのですが、それに対する返答は「複数名、4か月プログラムなら実施可」というものであり、現状からあまりにもかけ離れた回答となりました。

2012年度も2011年度の研修先であった中国・厦門（B大学）で、同様のプログラムで募集した。B大学と実現に向けて協議を重ねてきたが、このときA大学で手を挙げた学生は1名であった。この学生の中国語力（HSK 5級程度）と希望（企業研修、企業見学の機会をより多く設けてもらいたい。ホテルなどのサービス業で研修したい）をメールで伝えたところ、先方からの回答は「日本と関わりがある企業、サービス業（ホテルなど）への見学はできるが、参加する学生の人数がより多く、見学期間がより長く（短い場合は1ヶ月）なる。韓国の大学からの受入れの実績を紹介すると、全体を4か月とし、前半2か月は中国語の強化を、後半2か月は職業実習となっている」というものであった。協定大学が示した開催条件（参加者数、期間）は、A大学の想定とは大きく乖離しており、実行を諦めざるを得なかった。

語学研修に止まらず、希望する職種の就業体験を目指すとき、その実現には多くの課題が見られる。例えば中国のデパートでのインターンシップを企画したとしよう。まず参加条件として仕事に耐え得るだけの中国語力が求められる。また研修内容についての希望は学生個々で当然異なり、貿易業に関心がある者もいれば、銀行での研修を望む者もあり、デパートでの研修に魅力を感じる学生は限定される。自分の興味関心と合致するのでなければ、ただでさえ渡航費その他、金銭的な負担もある中で、手を挙げる学生は非常に限られるだろう。加えて、研修先の確保の難しさもある。国内でも受け入れ企業を見つけて細やかにコンタクトを取り、体制を整えるのは容易ではないが、これが中国となればどこから手を付けていいか担当者も困惑することだろう。幸い協定校から協力を得られるとしても、実施条件の折り合いをつけるのは難しい。多大な労力と時間をかけてなお実行への見通しは立ち難いが、それが1人2人の希望者のためとなれば、大学の国際化をも担うプロジェクトとして戦略的に位置づけることは難しいだろう。

2.2 D大学での海外インターンシップの実現に向けて

さて1年の空白はできたが、だからこそ2013年度は海外インターンシップを実行することが期待される。そこで、2012年度の一連の協定大学とのやり取りを踏まえ、日本語教師養成と関連付けた海外インターンシップが企画された。その理由は上述の課題解決と比較したとき、次のようにまとめることができるだろう。

まず、外国語の運用能力が絶対の参加条件とはならない。次に、A大学の副専攻である「日本語教員基礎資格取得講座」の履修生から一定数の参加が見込まれる。そして研修先の確保であるが、A大学の海外協定校が日本語教育機関でもあることから、そこがそのまま研修先となる。海外インターンシップをA大学の既存のカリキュラムとも連動させ、その効果を確実なものとする可能性も日本語教師養成には秘められている。

また多くの日本語教員養成機関で、海外教育実習はこれまでも実施されており、これを報告した論文も木元・嶋根（2013）や深澤・冷（2014）など数多い。中には受入先のメリットにも目を向けた崔・武田（2013）などもある。これらの取り組みは、インターンシップとしての性格を色濃く持つ。明確にインターンシップとして位置付けて海外日本語教育実習を取り上げた先行研究もある（後藤ほか2011）。つまり、日本語教師養成を目的とした海外インターンシップは先例を多く持つと言ってよいだろう。それだけに、安定した海外インターンシップ・プログラムとして位置づけることができるだろう。

3. 研修先との協議と開催までの経緯

2013年度の実施に向けて、12年度下半期から準備を開始することになった。A大学「就業力育成事業推進委員会」委員でもあり、日本語教師養成講座を主管する（後述の日本語教師養成講座「日本語教授法Ⅰ」「第二言語習得論」担当教員でもある）at02氏が企画、協定校への連絡・交渉、参加者への事前指導、引率など主要業務のほぼ一切を受け持っている。

では、どのような経緯を経て、インターンシップの実行にまで漕ぎ着けたのか、その経緯を記述しよう。A大学の海外協定校は2012年9月の時点で大学、高校、その他を合わせて93機関に及ぶ。数多くある協定校の中から、D大学（中国・広東省）に協力を要請した理由は、A大学「就業力育成事業推進委員会」に提出された出張計画書（資料2）に次のように記載されている。

資料2：「就業力育成事業推進委員会」会議資料（抜粋）

D大学を研修先とするのは、1)先般の反日運動から当初予定していた蘇州での実行が難しくなったが、これに比してD大学の所在地は反日運動が激しくなかったこと、2)本学卒業生が日本語教師としてD大学には実際に就職しており、その協力を得られることから適当であると判断したためである。

この時期の日中関係の悪化が与えたインパクトがいかに大きいかが汲み取れる。また一方で修了生が活躍する職場を研修地とすることは、養成講座の履修生にとっては、先輩の姿に近い将来の自らを投影することができ、今後のビジョンを打ち立てる上でより有効であると判断したからである。加えて修了生が環境整備について、細やかな協力が期待できることも選定理由であった。

2012年11月にD大学の日本語科 dt01氏、国際交流処 dt02氏にコンタクトを取ることから着手した。両者ともに海外インターンシップには好意的であることは直後に寄せられた返信メールからも窺える（資料3、4）。特に dt01氏の文面からは、D大学にとってのメリットも特に学生への波及効果という点で高いと認識していることがわかる。

資料3：dt01氏からの返信メール（抜粋。原文ママ）[2011年11月8日発]

「海外インターンシップ」のご計画ですが、もし実現できれば、うちの大学の国際化に特に日本語学科の発展に莫大の力を添えてくださると思います。授業サポート、日本語学習者との交流、日本語や日本文化の祭りなどのプランを実施すれば、学生さんの日本語への情熱を一層高めるに違いないと信じております。

資料4：dt02氏からの返信メール（抜粋。原文ママ）[2011年11月9日発]

提案した「海外インターンシップ」プログラムは本学の学生さんについても、本当にいいと思いました。

同年12月にはA大学から at01氏と at02氏がD大学を訪問し、直接協力を要請している（資料1の出張計画が実行されたもの）。この時の協議による成果は、出張報告文書（資料5）の中で次のように紹介されている。

資料5：出張報告文書（抜粋）

海外インターンシップについては当方からの提案を全面的に支持していただいた。実施に向けては交通事故など安全面での責任に関する懸念が寄せられたが、本学からの引率教員の監督下に置くことでD大学においても全学的な賛同を容易に得られるとの回答があった。実施時期については9月中旬から下旬を第一候補として考えたい。

この協議のD大学側の出席者は、D大学の国際交流所長である dt03氏とその部下である前述 dt02氏であった。安全面での責任の明確化が実施の条件となっているが、A大学が請け負うことで問題は解決された。加えてD大学からは、日本語科の学生からチューターを提供し、滞在中の生活面を支援することの申し出もあり、懸念の払拭が図られている。

なおD大学における歓迎ムードには、両大学の交流実績が一因となって寄与していると考えられる。D大学と交流協定を結んで以来の二重学位留学、短期留学の実績を下表に示した（表1）。A大学の全くの受入一方でこれまで推移してきたことがわかる。今回の取り組みを通してのA大学からの日本人学生の訪問実績は、ごく短期ではあるが相互交流の実現という意味も併せ持つ。

表1：A大学－D大学間の留学実績

	A大学 ⇒ D大学		D大学 ⇒ A大学	
	二重学位留学	短期留学	二重学位留学	短期留学
2009年	0名	0名	2名	14名
2010年	0名	0名	3名	6名
2011年	0名	0名	0名	0名
2012年	0名	0名	3名	11名
2013年	0名	0名	7名	6名
2014年	0名	0名	1名	2名

海外インターンシップ（日本語教育）の実現には、研修機関となる協定校の協力が欠かせない。そのため研修目的の十分な理解、日程の調整、責任の明確化など、事前に交渉が必須となる。およそ1年をかけてメールでの頻繁なやり取りの他、直接訪問しての協議が2度にわたって行われている点には注目すべきだろう。

4. インターンシップ概要

インターンシップの実際がどのようなものであったか、参加学生がとりまとめた『2013年度A大学海外インターンシップ（日本語教育）報告書』を基に、その概要を紹介する。以下に「概略」「参加学生」「研修日程・研修内容」「現職日本語教師との交流会」とに分け、筆者が再編して紹介する。

4.1 概略

海外の日本語教育機関を視察して業務の一端を知る。またTAとして業務の一端に関わるほか、日本語・日本文化イベントの企画・実施や日本語学習者との交流を通して日本語教育の実験を経験し、卒業後の日本語教師としてのキャリア形成に具体的に寄与することを目的とする。これに加えて近隣の澳門にも足を運び、日程後半の2日間を文化研修にあてている。

4.2 参加学生

A大学の3、4年生の女子学生5名が参加した。いずれもA大学日本語教師養成講座の履修生であり、2013年度春学期開講科目「日本語教授法Ⅰ」「第二言語習得論」の受講生である。既存の授業と連携することでインターンシップの効果を高めようとの考えから、上記いずれかの科目を履修していることが参加条件として設定されている。

4.3 研修日程・研修内容

2014年10月20日から29日にかけて実施した(10日間)。その日程と主たる研修内容は表2に示したとおりである。実際にD大学に滞在したのは3日目から7日目にかけての5日間であり、これに最寄りの観光都市である澳門での文化研修2泊3日が付随する格好となっている。

表2：研修日程

日程	研修内容	日程	研修内容
1日目	移動日(前泊)	6日目	授業見学/TA参加 日本文化紹介イベント準備 日本文化紹介イベント実施
2日目	移動日 D大学主催歓迎会	7日目	中国人日本語学習者との懇談 現職日本語教師との懇談 澳門へ移動
3日目	授業見学/TA参加 日本文化紹介イベント準備 中国人日本語学習者との懇談	8日目	澳門での文化研修
4日目	授業見学/TA参加 日本文化紹介イベント準備 中国人日本語学習者との懇談	9日目	澳門での文化研修 午後上海へ移動
5日目	授業見学/TA参加 日本文化紹介イベント準備 中国人日本語学習者との懇談	10日目	帰国

研修内容の中核としては、まず「授業見学/TA参加」が挙げられる。「授業見学/TA参加」は連日90分授業に2つずつ、計8クラスに参加した。その詳細は表3に挙げたが、ここで科目名にかっこ付けで示した数字は対象学年を示している。また日本語科目に限らず、講義系科目(「日本国情」「日本文学史」)も対象とした。科目担当者は全て日本人教師である。

また研修日程6日目に挙げられているように、「日本文化紹介イベント」を実施した。これは日本語学習者に対する日本文化の紹介を目的に、インターンシップ参加者が企画・準備・実施の全てを実施した。対象は2、3年次の中級以上の日本語学習者である。内容はすごろくを通して日本の観光地

や文化を知ってもらおうというものであり、すごろくのコマを都道府県に見立てて、学習者に日本一周旅行を味わってもらった。すごろくには各県の文化的特色を配しており、すごろくをした後、それと連動して用意したスライドを使ってその詳細を説明している。準備は中国渡航前から、精力的に行われており、完成したすごろくのシートはD大学の教室に今も掲示されているという^{註4}。

表3：参加授業

日程	時限	科目名	時限	科目名
3日目	1時間目	日語会話（二）	2時間目	日本国情
4日目	1時間目	日語会話（四）	2時間目	日語听力（三）
5日目	1時間目	日語会話（四）	3時間目	日本文学史
6日目	1時間目	日語会話（二）	2時間目	日語会話（四）

4.4 現職日本語教師との交流会

A大学の「日本語教師養成講座」の修了生であり、D大学の現職日本語教師である dt04氏、dt05氏との懇談の場を設けている。両氏は見学・TA 活動においても多くの機会を提供しており、また特に2013年3月にA大学を卒業したばかりの dt05氏とは、先輩として面識を持つ者もあり、インターンシップ参加者にとっては最も近い存在である。なお報告書ではこの dt05氏の「学生が授業に対して素直で積極的なので、クラス一体となって授業ができていると感じている」という発言を受け、「中国（海外）の学習者は目標も明確で向上心を持っており、日本語教師の立場からしても、自分が一生懸命に作った授業に一生懸命答えてくれる学習者がいるということは充実感を持って仕事をすることができる」と思ったことから、交流会を通して「特に印象に残ったこと」とであると記述している。

5. 参加者の声 —アンケート調査から—

参加者5名に対してアンケートを実施した。協力を要請した時点（2014年6月）で3名が卒業生（as01、as02、as03）であり、最終学期で「日本語教育実習」を終え、「日本語教師養成講座」を修了している。残り2名（as04、as05）は4年次に進級し、継続して「日本語教師養成講座」を履修している。

以下、巻末に資料として挙げたアンケートの質問項目に即して、参加者の声を取りまとめた。なお10段階評価は点数が高いほど好意的な評価であることを示す（詳しくは巻末資料を参照されたい）。また記述式回答については、代表的な回答を整理、抜粋して挙げるとともに、筆者による考察も併記する。

5.1 目的（Q.1、Q.2）

何を求めてインターンシップに参加したのか（Q.1）。記述式回答の中で主だったものを列挙すると、海外における日本語教師、日本語学習者の実態を知りたいことを望むという点で5人は共通している。また表4を見ると明らかなように今回の取り組みは、彼女たちの当初の目的を十分満たすものであったと評価されていることがわかる。

- 海外で日本語を学ぶ学生がどのような環境にいるのか知りたかった（as01）

- 日本語教師のイメージをはっきりと持つことができる (as02)
- 海外の学生は何を勉強したいか知ることができる (as03)
- 海外の日本語学習者と触れ合いたい (as04)
- 海外で働く日本語教員はどんな役割を担っているのか知るため (as05)

表4：目標達成に関する参加者別10段階評価

Q. 2	as01	as02	as03	as04	as05	平均
目標達成	9	10	9	10	10	9.6

5.2 研修内容 (Q. 3、Q. 4)

目標達成の手応えを参加者に与えることに成功したインターンシップであるが、研修内容個々に対して参加者がどのような感想を持つに至ったのであろうか。アンケートでは、①「現地（先輩）教員との交流」、②「学生チューター・日本語学習者との交流」、③「授業見学・TA」、④「日本文化紹介イベント」に分けて意見を求めた。

① 現地（先輩）教員との交流

- 現地で働く先生方の環境をお話いただく機会があり、とても貴重 (as01)
- 4年次の実習の話やアドバイスもいただけた (as01)
- 苦勞する面も何うことができた (as02)
- 大学の日本語教員から話を聞くよりも親近感がわきました (as04)
- 職務のことから普段の生活のことまで様々なことを何うことができた (as05)

交流の機会を得た現職教師が同じ大学で学んだ先輩であるということは、遠慮なく尋ねることができたなど大きなメリットを参加者にもたらしたことが窺える。またインターンシップが事後に控えた教育実習にも連携できている点は、特筆すべき効果であろう。

② 学生チューター・日本語学習者との交流

- 現地の学生の日本語の学習への意欲が強く伝わってきて、とても刺激だった (as01)
- 今でもメールのやりとりをしている (as02)
- ネイティブ・スピーカーとして責任感を持って行動しなければならない (as04)
- 学業に向かう姿勢のあり方に関しても良い刺激を受けた (as05)
- 中国人学生にとって日本語のどのような文法が苦手なのか、気づくこともできた (as05)

海外で学ぶ日本語学習者との交流は、日本語への学習姿勢に感銘を受けるに留まらず、同じ大学生として自己を振り返る機会となったようだ。また、だからこそ日本人として彼らの学習支援に誠実に取り組もうとする意志を強くしたという。さらに交流を通して、教育上の留意点にも目を向けるなど、インターンシップの目的に直結した効果も窺える。加えて帰国から10か月経っても関係性は維持されており、参加者にとっても現地の学習者にとっても、この交流が貴重なものとして捉えられているこ

とがわかる。

③ 授業見学・TA 活動

- 何人もの先生方の授業見学やお手伝いが出来たことはとても勉強になった (as01)
- 教育実習に活かすことが出来た (as02)
- 教え方や学習者とのコミュニケーション方法など分かりました。(as03)
- 日本文学など日本に関する授業を見学させていただくのは初めてで、日本に関する知識と幅広い授業への対応力が必要だと感じました (as04)
- 先生方の授業を見学し、それぞれ進め方や雰囲気も異なり、面白かった (as05)

多くの教員の授業に参加することは、教員の個性と日本語のクラスの多様性を知る機会になった。また海外の教育現場で日本語教師に期待される役割が日本語クラスに限らないことも知ったという。

①「現地（先輩）教員との交流」がそうであったように、この取り組みも教育実習に役立ったことが報告されてもいる。

④ 日本文化紹介イベント

- 反省点が多く、それを体験できたことは次に活かせる貴重な体験 (as01)
- 学習者の興味をいかに引くことが出来るのかと考えるのが大変 (as02)
- やってみると学習者に大好評でとても達成感がありました (as03)
- 実施してみると学習者のことを考えていなかった部分もあった (as04)
- 全員で確認したりするのがおろそかになっていて、本番でヒヤヒヤ (as05)

参加者間での連携や学習者の視点に立っての授業構築など、日本語教師として重視すべき事柄を自ら考える機会となったようだ。反省するところが多々あった一方で、事前の準備を含めて主体的に取り組んだ「日本文化研修イベント」は、だからこそ達成感を与えてくれるものであったことがわかる。

表5：総合評価に関する参加者別10段階評価

Q. 4	as01	as02	as03	as04	as05	平均
総合評価	9	10	10	10	10	9.8

上記①～④に渡っての感想を踏まえて、総合評価を10段階でもらったのがQ. 4である(表5)。平均9.8、4名が最高評価「10」としており、高い満足をもたらすプログラムであったことが裏付けられた。

5.3 時期、期間、研修地、研修費用 (Q. 5)

期間と研修地については、参加者全員から全く不満が出なかった。また時期と研修費用についても概ね好評であった(表6)。

時期に関しては、大学祭との兼ね合いや長期休暇中(夏休み、春休み)の実施を望む声が寄せられ

た。だが、長期休暇中は先方の都合を考えると実施は難しいだろう（「7. 研修先への波及効果」参照）。

表6：時期、期間、研修地、研修費用に関する参加者別10段階評価

Q. 5	as01	as02	as03	as04	as05	平均
時期	10	10	8	8	10	9.2
期間	10	10	10	10	10	10
研修地	10	10	10	10	10	10
研修費用	7	10	10	10	10	9.4

研修費用はより安ければよいとの意見が as01 から寄せられていた。見積資料によると「航空券」「国内交通費」「現地滞在費」など概算11万5千円だったが、大学からの補助を受け、また宿泊費や食費などは予想よりも抑えられたことから、実質負担額は5万円程度で済んだという（文化研修での現地交通費や遊興費等は除く）。経済的負担は軽微であるほど望ましいのはもちろんだが、多くの学生が満足していることから、まず不都合な金額設定ではなかったと評価できる。

5.4 後輩に向けて（Q. 6）

後輩にも強く勧めたいという声が高く、このプログラムには継続する価値を見出した参加者が多かった（表7）。その理由としては以下に抜粋したように、日本語教師という職を理解できる、特に海外における事情を知る機会となったこと、また研修先での就職の可能性への期待、さらには視野を広げるなど後述する基礎力の向上が挙げられる。

表7：後輩への勧誘に関する参加者別10段階評価

Q. 6	as01	as02	as03	as04	as05	平均
後輩へ勧誘	8	10	10	10	10	9.6

- 自らの視野も広がった（as01）
- リアルな日本語教師の仕事の現場を見ることが出来る（as02）
- 日本語教師としての大変さも分かることができるし、達成感を感じる貴重な経験だ（as03）
- 就職出来る可能性もないわけではない（as03）
- 海外における需要の方が多いのであれば、その現状や学習者と交流を持つておくべき（as04）

また後輩へのアドバイスとして参加者が挙げたものには以下のようなものがある。事前の準備や心構えの重要性を説く、学習者の視点に立つよう呼びかける、参加者間の連携に注意を促すなど、日本文化紹介イベントの振り返りとも連動したアドバイスが寄せられている。

- これでもかというくらい細かく準備していった方が良い（as01）
- どんな日本語教師になりたいのかというイメージを持っているといい（as02）
- 現地での学習者との交流を大切に（as02）

- 学習者の立場でどんな授業だったら楽しいか、何を一番勉強したいと思うか考えて (as03)
- 大学でも日本語の授業を見学しておく (as04)
- 参加者同士で細かく連絡を取り合うと良い (as05)

5.5 改善点 (Q. 7)

またプログラム改善に向けての意見も募った。より多くの交流や学びの機会を求める積極的な声が目立った。また国内と国外の環境の違いを把握するためにも、事前に国内での研修も設定することを勧めている。小規模での実施の効用についての言及も見られた。

- 人数はあまり多くない方が、話し合いもきちんとできるし、自分たちなりにまとめることができるのでいい (as01)
- 現地での教師の方々や学習者とより交流をする時間があればよい (as02)
- 授業見学の際、TAの機会を増やしてほしい (as03)
- インターンシップに臨む前に、まずA大学の日本語の授業を見学する機会があれば、現地に行った時に学習者のニーズの違いや学習者への配慮を把握しやすい (as04)

5.6 文化研修 (Q. 8)

澳門で2泊しての文化研修もまた高評価を得ている (表8)。外国語使用の実践、異文化接触の機会として評価する声は高いが、さらには日本語教師との成長にも寄与するイベントとして捉える参加者もいた。また「ご褒美」としてインターンシップへのモチベーションの向上にもつながっていたことが調査からは読み取れた。

表8：文化研修に関する参加者別10段階評価

Q. 8	as01	as02	as03	as04	as05	平均
文化研修	10	10	8	10	10	9.6

- 英語や中国語などを実践するのにもこのような機会は絶好のチャンス (as01)
- 多くの世界遺産を訪れ、海外文化に触れることができ、広い視野を持てる場所 (as02)
- 多言語の街であるため、語学教師を目指す参加者には、多言語の教室運営を行う上での注意点やアイデアが得られる良い土地だ (as04)
- 「もうすぐでマカオ」と思いながら乗り越えたのも事実で、ご褒美感覚ではあるが、このような企画があると、よりモチベーションが上がる (as05)

6. インターンシップの効果 —基礎力ポートフォリオから—

参加者5名はインターンシップの事前と事後とで「基礎力セルフチェック」を実施している。これは(株)リアセックが作成した基礎力ポートフォリオのためのアンケートであり、表9に挙げた24の観点に基づいて、対象者が自らの能力を9段階で自己評価しようというものである。9は各項目で最も高評価であり、1はその対極となる。各設問は奇数ポイントごとにそのイメージが掴めるよう、can-

do 評価が文章化されている。

一例としてQ. 1の「親しみ易さ」を取り上げてみよう。最高評価である9が「初対面の人達と容易になごやかな関係をつくることができる」となり、以下7「誰とでも気軽に笑顔で会話することができる」、5「誰とでも笑顔で接することができる」、3「自分から話しかけることは少ないが、相手から話しかけられれば自然に会話することができる」、1「不愛想な方だ」と設定されている。これを目安として、自らのポイントを自己評価しようというものである。

アンケート調査はインターンシップの前後で実施した。1回目調査は事前ミーティングの中で、2回目調査は帰国後直ちに実施・回収している。ここで得られた結果は、今回の取り組みが参加者にとってどのような影響があると自らが評価しているのかを探る上で拠所となるだろう。なお2回目調査の際に、1回目のデータを提示することはしていない。

表9：「基礎力ポートフォリオ」質問項目

No.	質問項目	No.	質問項目
Q. 1	親しみ易さ	Q. 13	独自性理解
Q. 2	気配り	Q. 14	自己効力感／楽観的思考
Q. 3	対人興味／共感・受容	Q. 15	主体的行動
Q. 4	多様性理解	Q. 16	完遂
Q. 5	役割理解／連携行動	Q. 17	情報収集
Q. 6	情報共有	Q. 18	本質理解
Q. 7	相互支援	Q. 19	目標設定
Q. 8	話し合う	Q. 20	シナリオ構築
Q. 9	意見を主張する	Q. 21	行動を起こす
Q. 10	建設的・創造的な討議	Q. 22	修正・調整
Q. 11	セルフアウェアネス	Q. 23	遵法性・社会性
Q. 12	ストレスコーピング	Q. 24	創造力

1回目調査（次頁表10：事前調査における基礎力自己評価）と2回目調査（表11：事後調査における基礎力自己評価）の結果を参加者別・項目別にそれぞれまとめた。また表11には1回目調査の平均と2回目調査の平均の差異も、基礎力の伸び幅を示すものとして明記した。

表10：事前調査における基礎力自己評価

参加者	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q10	Q11	Q12
as01	4	5	7	7	7	5	5	4	5	5	5	3
as02	7	5	6	7	7	5	7	7	5	5	7	7
as03	2	7	3	5	5	5	5	4	1	3	5	3
as04	5	7	9	6	7	5	7	5	5	7	5	7
as05	6	7	6	6	6	6	6	6	4	5	8	2
平均	4.8	6.2	6.2	6.2	6.4	5.2	6	5.2	4	5	6	4.4
参加者	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	Q19	Q20	Q21	Q22	Q23	Q24
as01	4	5	5	4	4	4	6	5	7	5	4	4
as02	7	6	7	8	7	7	7	6	8	8	7	6
as03	5	5	6	3	7	7	7	5	5	5	5	6
as04	5	9	7	7	5	5	7	9	7	5	5	5
as05	4	7	4	7	5	6	6	4	6	5	7	6
平均	5	6.4	5.8	5.8	5.6	5.8	6.6	5.8	6.6	5.6	5.6	5.4

表11：事後調査における基礎力自己評価とその伸び幅

参加者	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q10	Q11	Q12
as01	8	5	7	7	6	6	5	5	6	6	6	2
as02	7	7	6	7	8	7	7	7	6	6	7	7
as03	4	5	4	4	5	4	4	4	5	4	5	5
as04	7	7	7	7	8	6	7	7	8	7	7	7
as05	8	7	6	8	7	6	7	6	6	7	9	4
平均	6.8	6.2	6	6.6	6.8	5.8	6	5.8	6.2	6	6.8	5
伸び幅	+2.0	0.0	-0.2	+0.4	+0.4	+0.6	0.0	+0.6	+2.2	+1.0	+0.8	+0.6
参加者	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	Q19	Q20	Q21	Q22	Q23	Q24
as01	4	6	5	4	7	6	8	6	6	6	7	6
as02	7	7	6	7	7	6	6	6	7	7	7	7
as03	6	9	4	5	5	7	7	5	7	5	6	5
as04	7	7	7	8	7	8	7	8	8	8	7	7
as05	7	7	7	8	7	6	6	5	7	7	7	6
平均	6.2	7.2	5.8	6.4	6.6	6.6	6.8	6	7	6.6	6.8	6.2
伸び幅	+1.2	+0.8	0.0	+0.6	+1.0	+0.8	+0.2	+0.2	+0.4	+1.0	+1.2	+0.8

参加者5名の平均を中心にその特徴を述べたい。1回目は「7」以上となった項目はなく、最も高いポイントがQ.19とQ.21の「6.6」であった。その他「6」以上の比較的高評価であったものは、Q.5、Q.14の「6.4」、Q.2、Q.3、Q.4の「6.2」、Q.7、Q.11の「6」がある。全体24項目中9項目に留まる。また最も低い評価となったのはQ.9の「4」であった。

一方2回目では、Q.14「7.2」、Q.21「7」と「7」以上の高い平均値を示すものが2項目、また「6」以上に達した観点は、この他に18項目に及ぶ。最低評価はQ.12の「5」であり、ここからも全体的にポイントを伸ばしていることが見て取れる。

個人別に1回目から2回目への変化に目を向けると、最大で4ポイント伸ばした参加者もいる(as01のQ.1、as03のQ.9、14)。3ポイント増まで含めれば、as04とas05にも顕著な伸びが認められる。微増も含めてas01が14項目、as02が7項目、as03が10項目、as04とas05が共に15項目、その成長が確認できる。ただしas02は変化がない項目、マイナスに転じた項目が17項目もあることから、むしろその効果は限定的だといえる。

しかし全項目の平均値では、as02を含む5名全員が1回目から2回目にかけて増加している。表12には1回目と2回目、さらにその伸び幅の平均値を個人別に整理、紹介した。程度の差はあれ、インターンシップが「基礎力」向上に奏功するところがあったと言えよう。

5人全員が程度の差はあれ、ポイントを伸ばした観点にQ.9「意見を主張する」がある。平均+2.2という成果も、設問中最も高い伸び幅であり、特に目立って効果があったと言えるだろう。集団の中で自分の考えをいかに伝えるか、この力を伸ばす機会に海外インターンシップは恵まれている。

表12：参加者別ポイント平均値とその伸び幅

参加者	1回目(平均)	2回目(平均)	伸び幅(平均)
as01	4.958333333	5.833333333	+0.875
as02	6.625	6.75	+0.125
as03	4.75	5.166666667	+0.41667
as04	6.291666667	7.25	+0.95833
as05	5.625	6.708333333	+1.08333

ところで、最も効果がなかったのがQ. 3「対人興味／共感・受容：人に興味をもつ／相手の話に共感し受けとめる」であり、平均の伸び幅が唯一マイナスとなった(-0.2)。can-do評価の記述を見ると、最低評価である1が「自分の話を優先しがちで、相手の話を最後まで聞くことができない方だ」とある。新米日本語教師に対して、小島(2002)は「学習者の話す機会をできるだけ増やす」ため「教師は話しすぎない」よう注意を呼び掛けている。Q. 3は日本語教師という職に直結する基礎力の一つとして、特に目を配る必要があるだろう。

7. 研修先への波及効果 —D大学日本人教師へのインタビューから—

D大学の日本人教師であり、A大学の日本語教師養成講座の修了生でもある dt03氏と dt04氏に、①「インターンシップがもたらしたメリット」、②「実施時期の適不適」、③「大学間交流への効果」の3点について尋ねた。両氏は「見学・TA活動」での授業提供、「現職日本語教師との交流会」への参加と、研修全般に渡って協力した人物でもある。受け入れ機関の立場で、このインターンシップにコメントしてもらった。

① インターンシップがもたらしたメリット

- 日本人との接点が少ないため、D大学の学生たちはすごく楽しんでいた (dt03)
- 日本人の留学生がほんとに少なくって、2人3人ぐらいであり、日本人と接する機会が授業以外にない (dt04)
- チューター学生は上級者が多く、普段の授業では物足りなく感じている。友達同士の会話の機会がないので、いい影響があった (dt03)
- チューター学生は朝早く起きて参加者をケアするなど大変だったようだが、その価値はあった (dt04)
- 学生も私たちが教えていない、知らないこともそこで知ることができた (dt04)

dt01氏からも dt02氏からも期待を寄せられていた本プログラムだが、どのようなメリットを現地スタッフは感じ取ったのだろうか。現地日本語学習者にとってはネイティブ・スピーカーとの接点が限られており、日本人学生の来訪は貴重な交流と日本語使用の機会になったことがわかる。中でもチューター学生は参加者との接触が多かったが、日頃教師が授業で扱わない友達同士の会話表現のインプットや実際使用の機会としても意味があったとのことである。

D大学の学生にもメリットが見受けられたこの企画だが、一方で改善すべき事柄にはどのようなものがあるだろうか。より高い効果を求めての要望として dt04氏から得られた意見を、以下に2点紹介したい。

- 最初に何かしらの交流があってからの授業見学だったら良かった (dt04)
- インターンシップの学生の中に男性が1人でもいてほしい (dt04)

限られた時間をより有効に活用するための人間関係構築の機会の設置、またビジターの多様性の確保が求められる。前者はインターンシップの日程序盤に、参加者と研修先の日本語学習者との交流行

事などを積極的に組み入れることで解決できるだろう。後者は今回の参加者が偶然5名とも女性であったことから寄せられた意見であるが、日本語を学ぶ男子学生もせつかくのネイティブ・スピーカーの来訪とはいえ、異性が相手では萎縮するところがあったのかもしれない。先に挙げた友達同士の会話表現のインプットに付随し、男性ならでは言葉遣いなども期待されるだろう。

② 実施時期の適不適

実施時期については、事前交渉において適当とされた10月下旬に実施されている。現場の教師にとってこの時期が負担にならないかどうか尋ねたが、両名ともに適当であったとの回答が得られた。春学期は5月、秋学期は10月と、日本の大学の学年暦では授業期間中であるが、受入機関の都合については十分に考慮する必要があるだろう。

- 学期が始まってちょうど2か月ぐらいは長期休暇からのリカバリーも十分であり、学生にとっていいタイミング。また教師にとっても特に忙しい時期ではなくちょうどいい。春学期であれば5月ぐら이가適当 (dt03)
- だんだん教師にも慣れてきたころであり、時期的には良かったんじゃないか (dt04)

③ 大学間交流への効果

「3. 研修先との協議と開催までの経緯」でも取り上げたが、今回の取り組みはA大学とD大学の大学間交流にも寄与するところがあったのではないかと考えた。留学生を一方的に受入れてきたA大学であるが(表1)、この点について今回の日本人学生訪問が与えた効果を現地スタッフがどう捉えているか尋ねた。

- D大学の学生が日本に留学に行くとなると、なかなかA大学に行きますっていう学生がいない。しかしこういう交流があって学生の印象にも残った。またD大学の先生方もA大学をもっと留学の候補地として前面に出してくれるんじゃないか (dt04)
- A大学からの留学生がいない中で、大学間交流を活発にするきっかけが作れたのかもしれない (dt03)

D大学の中でのA大学の存在感が希薄であること、D大学からの留学生送り出しが何ら保証されたものではないという状況がまず窺える。その上で、D大学内でA大学の存在をアピールする効果があったこと、留学生送り出しへの後押しにつながることを期待できる取り組みであったことがわかる。A大学がD大学からの留学生獲得を望むのであれば、双方向での学生交流を積極的に検討すべきであり、その方策の一つとしてこの海外インターンシップが位置付けられるだろう。

8. おわりに —その効果と今後に向けた提言—

8.1 海外インターンシップ(日本語教師養成)がもたらすもの

国内におけるインターンシップであれば様々な職種、様々な技能を巡って豊かにその機会が設けられるだろう。ところが舞台が海外となると、研修先の確保や開催条件、参加条件など制約も多く、そ

の遂行は格段に難しくなる。しかし日本語教師養成を目的とした海外インターンシップは、上記制約を取り除くことのできる数少ないプログラムである。

2013年度にA大学が企画し、協定校であるD大学で実施した海外インターンシップ（日本語教育）は参加者の満足度も高く、日本語教師とは何かを知り、将来の仕事を意識する上で、貴重な機会となった。またそれと同時に参加者個々の基礎力を向上させる効果も見られた。中でも自己主張する力を引き上げること、参加者の多くは手応えを感じている。

一方で、D大学の日本語学習者にメリットをもたらす効果もこのプログラムにはあった。ネイティブ・スピーカーとの接点が限られる学習者に海外インターンシップがもたらした余慶は、現地日本語教師からも高く評価されている。

また双方に得るところのある企画は、大学間の交流事業としての価値をも持つ。そして研修先の教員や学生にその存在を強く印象付けられれば、研修先からの今後の留学生獲得にも期待が持てる。あくまでもこの点は期待に止まるが、少子化が進む日本において留学生獲得の重要性が大学経営に大きく影響することを思えば（春口 2014）、目を向けるべき価値を含むだろう。

プログラムの成功の一因にはA大学の日本語教師養成講座修了者が、日本語教師としてD大学に赴任していることが大いに寄与した。講座修了者が現役教師としてインターンシップ参加者を迎え入れてくれたことは、同講座と海外インターンシップ（日本語教育）とを強く結びつける効果もあったと評価できる。補足となるが、dt03氏も dt04氏も在学中に今回同様の企画があったらどうだったかと尋ねたところ、必ず参加しただろうと口を揃えて答え、参加者を羨んでいたことを付記する。

8.2 提言

最後に本研究の一連の調査から、日本語教師養成を目的とした海外インターンシップをより良いものにするため、実施する上での注意すべき事柄を提言として取りまとめたい。以下、A「事前学習」、B「研修先の選定」、C「研修内容」に分けて列挙し、参考に供する。

A「事前学習」

- ① 既存のカリキュラム（日本語教師養成講座）との連動性を図る。
- ② 事前研修として国内での日本語クラスへの機会も与えられると良い。
- ③ 日本語教師という職と留意すべき基礎力とを結びつけ、何をどう伸ばすか意識付けして研修に臨ませると良い。
- ④ 研修前から参加者間での十分な連携と事前準備を促す（少人数だと参加者による自律的な管理がより期待できる）

B「研修先の選定」

- ① 協定校での研修とした場合、大学間交流としての視野を持って研修先を選定すると良い。
- ② 講座修了生が活躍する日本語教育機関を研修先に選定できると非常に効果的である。

C「研修内容」

- ① 現地では豊富な授業参加・TA 活動の機会を設ける。

- ② ①に先立ち参加者と日本語学習者との十分なコミュニケーションの機会を提供する。
- ③ 参加者が自ら企画・運営するイベントはより多くの学びの機会となり、欠かせない。
- ④ 文化研修もモチベーション向上など間接的な効果が望めるものであり、日程に加えると良い。

注

- 1 「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について（案）」文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/055/attach/1338000.htm
- 2 A大学の教員（t=teacher）・職員の略称として at、同様にD大学の教職員として dt と表記する。
- 3 高雄コースは企業研修が4日間（旅程は15日間）実施されており、12日間の滞在で1日を研修に割いた厦門コースと比べれば幾分インターンシップとしての比重は高い（引率者が作成した『業務出張報告』による）。
- 4 D大学の日本語教師（dt04、dt05）へのインタビューより（本稿「7. 研修先への波及効果」参照）

【参考文献】

- 木元めぐみ・嶋根大祐（2013）「春学期海外教育実習報告－2012年モスクワ市立教育大学－」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』3、pp. 52-62、国際教養大学
- 小島聡子（2002）『初心者向きすぐに役立つ日本語の教え方』アルク
- 後藤雅人・平井佑樹・金菊花・若菜結子・杜婧・五十嵐順（2011）「シンポジウム海外日本語教育インターンシップ・国際日本語教育実習：遠隔地での学びとその支援」『21世紀アジア学研究』9、pp. 91-96、国土館大学21世紀アジア学会
- 崔殷懌・武田知子（2013）「日本語教育実習生受け入れによる韓国人大学生の日本・日本人・実習生の授業についてのイメージ変化」『日本語教育方法研究会誌』20（1）、pp. 66-67、日本語教育方法研究会
- 春口淳一（2014）「小規模大学の留学生政策－国際交流担当職員へのインタビューからみえてくるもの－」『第19回 JAISE 研究大会プログラム・要旨集』、pp. 41-42、留学生教育学会
- 深澤のぞみ・冷麗敏（2014）「グローバル人材育成としての日本語教師養成海外日本語教育実習の実践と成果」『金沢大学留学生センター紀要』17、pp. 43-55、金沢大学

【巻末資料】 アンケート用紙

～アンケートのお願い～

Q.1 どうして「海外インターンシップ」に参加しようと思いましたか（目的・期待）。

<記述回答（以下、回答欄省略）>

Q.2 目的・期待していたものは達成できましたか。

<10段階評価 該当する点数に○をつけてください（Q.4、5、6、8同様）>

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

十分達成できた

全く期待外れだった

Q.3 D大学での研修について、印象に残っていることがあれば、教えてください

（良かったこと、悪かったこと、役に立ったこと、残念だったこと・・・などなど）

- ① 現地（先輩）教員との交流 <記述回答>
- ② 学生チューター・日本語学習者との交流 <記述回答>
- ③ 授業見学・お手伝い <記述回答>
- ④ 日本文化紹介イベント（事前準備も併せて） <記述回答>
- ⑤ その他 <記述回答>

Q.4 D大学での研修を総合評価してください

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

とても意義深いものだった

全く価値がなかった

Q.5 時期や期間、研修地、研修費用はどうでしたか。

（時期）

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

とてもよい

悪い

⇒「10」以外を選択した人。いつならよかった？（ ）

（期間）

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

とてもよい

悪い

⇒「10」以外を選択した人。何日間ならよかった？（ ）

(研修地)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

とてもよい

悪い

⇒「10」以外を選択した人。どこならよかった？ ()

(研修費用)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

とてもリーズナブル

高すぎる

⇒「10」以外を選択した人。いくらならよかった？ ()

Q.6 今後「海外インターンシップ」は続けていく価値があるでしょうか。

後輩に勧めますか。どんな後輩に適しているでしょう。後輩のためにアドバイスがあれば。

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

強く勧める

絶対勧めない

⇒どうして？その理由を。 <記述回答>

⇒「勧める」を選んだら、どんな後輩に？ <記述回答>

※ 参加を希望する後輩がいたら、どんなアドバイスをしますか？ <記述回答>

Q.7 「海外インターンシップ」へのアドバイスがあればぜひ。 <記述回答>

Q.8 文化研修として訪れたマカオ。あった方がよい？不要？

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

あった方がよい

不要

⇒どうして？その理由を。 <記述回答>

Q.9 その他、自由にコメントを寄せてください。 <記述回答>

ありがとうございました。いただいた回答は論文執筆のためにのみ用い、特に個人情報の取り扱いには氏名を伏せるなど最大限配慮します。

2014年6月27日

春口 淳一